



癒しの伝統文化に触れる旅

ぬのばし かんじょうえ

# 布橋灌頂会が復活

かつて立山は、女性は登ることを許されない山だった。江戸時代、立山のふもと芦峯寺では、女性を救う儀式として布橋灌頂会が行われていた。

9月18日、布橋灌頂会が芦峯寺で復活した。県民芸術文化祭2005地域文化フェスティバルとして再現された伝統行事には、県内外から約4,000人が参加。穏やかに流れる時間や、ゆったりと響く雅楽の音色を堪能した。

江戸時代まで信仰の山として栄えた立山だったが、明治政府の神仏分離政策により次第にその色を失っていく。昭和に入ったころはすでに、信仰の山ではなく厳しさを求める登山家のあこがれになっていた。さらに昭和46年、立山・黒部アルペンルートの全線開通により、日本を代表する国際観光地へと姿を変えた。「信仰」から「登山」、「観光」の山へとその色彩を変化させてきた立山は今、次世代に「受け継ぐ」山として人々の注目を集めている。

『特集 立山に生きる』では、この4つのテーマごとに立山と深く関わる人物にスポットをあてる。彼らの言葉の中から、私たちのふるさとをあらためて眺めてみたい。【特集 21ページまで】



■布橋灌頂会：白装束を着た女性が閻魔堂でざんげ【上右写真】した後、目隠しをして白布を引いた布橋を渡り【中写真】真っ暗なうば堂に入る。うば堂の唐戸が開き光が差し込む【上中写真】と正面に立山が現れ極楽往生が約束される儀式。立山曼荼羅絵解き【下写真】や曼荼羅音楽会【上左写真】も開催された。



# 【特集】立山に生きる